

語用論からみる言語と身体性

小野正樹（筑波大学）

要 旨

言語と身体性の関係は、様々な目的、分野、アプローチで議論されているが、本稿では、語用論と身体性の関わりを追究する。初めに身体性と言語の関わりを先行研究から整理し、ポライトネス理論で扱われていた「負担」「距離」の概念、および「距離」の点から、両者の関係を述べる。また、言語と身体性の関わりが言語教育や、日本語らしさの保持にも重要であることを述べる。

キーワード:ノック数、距離、視点、言語教育の課題

1. 本研究が対象とする身体性

言語と身体性についての関連性は、今に至るまで多くの研究がある。身体性の社会学の研究可能性として、伊藤（1991）では4種類のパースペクティブと5種類の身体論の関係を図1のように示している。パースペクティブとして、身体とは何か、身体の解放、身体の社会・歴史的拘束、身体と意味世界に分け、身体とは何かには生物有機体としての身体と心身論、身体の解放として心身論と演技する身体、身体の社会・歴史的拘束には演技する身体と社会・歴史と身体、身体と意味世界には身体と社会・歴史と象徴身体論が関わりと整理している。

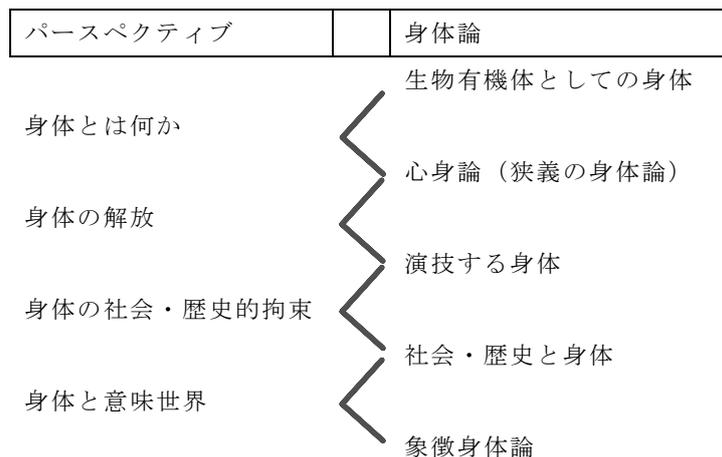


図1 身体論の系譜

この分類の主旨は、「身体と自己、身体と身体、自己と他者の間に生じたズレや衝突という領域は、不可視の身体と社会学が出会える場所」という社会学の今後の方向性を示したものである。この社会学を言語研究に置き換えて考えると、言語研究と身体論との関わりは、ジェスチャーなどのボディコミュニケーションといった可視化できるものから、不可

視なものとして「直感と理解、経験と分類・抽象化、体験・経験と時間といった問題が潜んでいる」点から、言語を通じた身体感覚の鋭い感覚が挙げられる。

本稿では、言語学の中でもポライトネス理論研究を中心に論じたい。ポライトネス理論が自己の主観性と、自己と他者の関係である間主観性研究に関わるためである（小野・李 2016）。ポライトネス理論を牽引してきた Leech(1983)の「ポライトネスの原理 (the politeness principle)」の「気配りの原則 (Tact Maxim)」と「寛大性の原則 (Generosity Maxim)」では、以下のように「負担」「利益」という用語が見られる。

(1) 「ポライトネスの原理 (the politeness principle)」 Leech(1983)

「気配りの原則 (Tact Maxim)」

(a) 他者の負担を最小限にせよ

(b) 他者の利益を最大限にせよ

「寛大性の原則 (Generosity Maxim)」

(a) 自己の利益を最小限にせよ

(b) 自己の負担を最大限にせよ

特に Leech(1983)の「負担」は身体動作への「負担」を含むことから、身体性との関わりがある。話者は聴者へ働きかけを行い、聴者の働きかけに対応する身体動作を話者は期待する。話者の働きかけ、聴者の対応する身体動作を、本稿では身体性と言う。

次に、Brown and Levinson(1987 以下 B&L 1987)が提示する FTA 度計算式 (computing the weightiness of an FTA)に見られる「距離」「力」「付加」においても、「距離」は話者と聴者の距離感を計るもので、話者と聴者の可視的な「距離」に加え、心的な距離もあり、身体性とどのように関わるのかを考えたい。

(2) FTA 度計算式 (Computing the Weightiness of an FTA) (Brown and Levinson (1987))

$$W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$$

変数

D(S, H) : 話者 S と相手 H の社会的距離 (Social Distance)

P(H, S) : 相手 H の話者 S に対する相対的力 (Power)

R_x : 特定の文化で、行為 x が相手にかける負荷度 (Ranking of Imposition)

Leech (1983)の「ポライトネスの原理 (the politeness principle)」でいう「負担」とは人間の行為に関わるものであり、B&L (1987)の FTA 度計算式で扱われる「距離」とは身体性と言語の関わりにおいて密接な関係がある。こうした点を踏まえて、本稿で言う身体性とは、「物理世界と身体を通して接触することで得られる特質」のこととする。

2. ドアのノックに見られるポライトネス

言語行為と同時に伴う身体性を、コミュニケーションの点から論じたい。研究の出発点は、初級日本語教科書に見られる会話場面である。筆者が、初級日本語クラスでハンガリ

一母語日本語学習がノック数について、教授の部屋を訪問する際に2回は異文化であると発話したことが、本稿のきっかけともなっている。

a. A student visits a teacher's room. 🏠👤

A: 学生 がくせい B: 先生 せんせい

A: (knock-knock)
 B: はい。
 A: 失礼します。
しつれい
 B: { やあ。⬇️
 あら。⬆️
 A: あの、ちょっとよろしいですか。
 B: どうぞ。



☆ b. A student visits a friend's room. 🏠👤

A, B: 友だち とも

A: (knock-knock)
 B: はい。
 A: こんにちは。
 B: { やあ。⬇️
 あら。⬆️
 A: ちょっといいかな。
 B: うん。何。 なに ⚡



図 2 Situational Functional Japanese Lesson 8

現代日本においては、主婦と生活社編(2003)、坂本(2017)などのビジネス書でも、フォーマルな場面でのノックス数は2回程度とされる。ドアのノック数やノックの強弱については、19世紀のイギリスでの言語事情に興味深い記述があり、The Magnolia, Or, Literary Tablet(1833 オンライン版)に、ノックの回数と社会的地位や職業との関係性が書かれている。

表 1 ノック数と母語話者別データ

ノックの回数	ノックする主体
1回	低い身分の者
2回	郵便配達・仕事での訪問
3回	家族、親戚、関係者
4回	貴族階級などの上流階級
4回を2回	王族、大富豪

ドアのノックの回数は、ノックを行う主体の主観性と、ノック場面の参与者間的主観性を反映するものである。そこで、ノック数が文化により異なるのか、小調査を行った。日本を含め、ウズベキスタン、カザフスタン、韓国、クロアチア、台湾、中国、ベトナム、

マダガスカル、ラオス、ロシアの 10 の国や地域（50 音順）からの留学生への聞き取り調査である。ノックする場面は以下の 6 場面である。

表 2 ノックの相手と状況

	相手と状況
場面 1	教授と約束した時間に研究室のドアをノックする
場面 2	教授と約束無しで研究室のドアをノックする
場面 3	友人の部屋/家のドアを約束した時間にノックする
場面 4	友人の部屋/家のドアを約束無しでノックする
場面 5	学内のトイレのドアをノックする
場面 6	レストランのトイレのドアをノックする

各場面の総計としての平均ノック数と、その平均値より多い母語話の国・地域を示したものが表 3 である。

表 3 ノック数と母語話者別データ

場面	平均回数	平均以上の国・地域
1	2.2	クロアチア、ラオス、マダガスカル、ロシア
2	2.4	中国、カザフスタン、マダガスカル、ロシア、ウズベキスタン
3	2.2	中国、フランス、マダガスカル、台湾、ウズベキスタン、ベトナム
4	2.6	中国、カザフスタン、マダガスカル、台湾、ウズベキスタン、ベトナム
5	1.6	日本、カザフスタン、韓国、マダガスカル、台湾、ウズベキスタン、ベトナム
6	1.8	日本、韓国

ノックの回数は現代日本ではビジネスマナーとして示されており、慣習的なものである。本データから興味深いことは、日本と韓国の類似性で、両言語が共通して、場面 5 と 6 では平均値を上回っている。両言語は敬語を有し、儒教の文化意識が強く、目上・目下、あるいはウチ・ソトの関係が語用論的分析の記述にも多々あることと無縁ではなからう。

3. 距離の捉え方

「距離」については、B&L(1987)は社会的距離(Social Distance)をパラメーターとしているが、「距離」という用語を CiNii (NII 学術情報ナビゲータ)を利用して「的距離」として検索すると、タイトルに「距離」が含まれているものが 549 件あり、73 語が認められた(検索日 2020 年 1 月 18 日)。検索された語を具体的な距離か、抽象的な距離か、論文掲載分野は文系か理系か、一般的・学際的に分け、50 音順に示したものが表 4 である。

表 4 専門用語から見る距離の捉え方

	文系分野	理系分野	一般・学際分野
具 体 的 距 離	(3 語) 身体的距離、戦略的距離、費用的距離	(18 語) 遺伝的距離、解剖学的距離、確率の距離、技術的距離、3 次元の距離、視覚的距離、進化的距離、斬近的距離、組織学的距離、対数の距離、断面的距離、治療的距離、定性的距離、適応の距離、電気的距離、統計的距離、標的距離、分類学的距離	(4 語) 音韻的距離、空間的距離、測地的距離、地理的距離
抽 象 的 距 離	(26 語) 意味的距離、意味論的距離、概念的距離、感情的距離、幾何学的距離、機能的距離、経済的距離、計量表現学的距離、現象的距離、実存的距離、ゴシップ的距離、社会的距離、主観的距離、主観的時間的距離、象徴的距離、心の距離、心理的距離、精神的距離、政治経済的距離、体験的距離、对人的距離、对人心理的距離、道德的距離、美的距離、文化的距離、歴史的距離	(15 語) 宇宙論的距離、局所的距離、光の距離、光学の距離、進化的距離、線形的距離、双曲的距離、知覚的距離、聴覚的距離、天文学的距離、肉眼的距離、熱学的距離、非アルキメデスの距離、非対称的距離、物理的距離	(7 語) 経験的距離、時間的距離、絶対的距離、相対的距離、内の距離、認知的距離、批評的距離、理論的距離、

この表から、「距離」が現実社会のセンチ、メートルや、キロメートルなどの可視的で空間的な「距離」だけではなく、時間的な距離が多いこと、そして、人間の精神活動を表す内面的な「距離」、すなわち抽象的な「距離」が様々な分野で多く用いられていることがわかる。特に内面的で抽象的な「距離」は不可視的なものである。B&L (1987) の指摘する「話者 S と相手 H の社会的距離 (Social Distance)」自体が抽象的な距離であり、その内容についてはこうした抽象的な距離との関わりがあろう。

5. 身体性と日本語語彙表現「間 (ま)」

この複数の概念を表す日本語は「間 (ま)」である。赤坂 (2003) でも、「間」のとり方が的確であることを「間が良い」「間が合う」、的確ではないことを「間が悪い」「間が合わない」、まったく的確ではないことを「間が違う」とか「間が抜ける」と言うことが指摘され、「間」という概念が日本の伝統的芸能、武道などさまざまな「道」でも現在も使用されているだけでなく、「間」を含んだ語が日常的に使用されていることから、語用論的対象と

考え得る。この「間」は、B&L(1987)は社会的距離(Social Distance)だけではない、身体的距離、心理的距離、社会的距離、文化的距離、精神的距離、主観的時間的距離、感情的距離、对人的距離、道徳的距離、美的距離とも結びついてた複合的「距離」で、伝統的芸能や武道が、能で言うシテ（「仕手」「為手」とワキ（「脇」）、武道の形で言うトリ（「取り」）とウケ（「受け」）の間主観的「距離」と考えられる。

6. 体の動かし方と日本語表現について

身体性は、何に基づき、言語表現にも関わりがあるのか。言語と身体性の関係性については、小林・中嶋（2019）でも文化論の視点から「ことば」「こころ」「からだ」の点から西欧とアジアを軸として論じている。小林（同 p. 161）では、「人間の「からだ」は根源的に、天地の垂直性に依拠しており、そこでは「天」に向かって飛翔するベクトルと大地に向かって下降していくベクトルがせめぎあっている」として、「人間の各文化は、それぞれ独自の仕方で、「からだ」の特異点を中心化し、そこから「からだ」を再組織することで文化を形成している」と述べている。さらに、「日本の文化は、「からだの中心」をもっとも低い、ほとんど「座っている」（「腰かける」ではなく！）一に持ってくることで、きわめて特異な文化をつくりあげた」と結論づけている。次表は、小林の整理に小野の解釈として、「種類」「運動」「足の動かし方」「意識する身体部位」を加筆したものである。

表5 <からだ>の動かし方

種類	運動	足の動かし方	意識する身体部位
クラシックバレエ	飛翔（跳ぶ）	ポワント	胸
西欧的ダンス	運動（踊る）	ドゥミ＝ポワント	太陽神経叢
能	存在（歩く／座る）	スリ足	肚

この表を解釈すると、日本語の視点の同一性と身体性の関係には関係があるように思える。日本語では視点を固定して述べることができるという語用論的特徴である。語用論的言語類型論の観点から言えば、日本語が「視点固定型」の言語であるのに対して、中国語は「視点移動型」の言語である（彭 2016）。こういった根本的な相違は、「もらう」「くれる」などの授受表現や使役、受身表現などヴォイスを含めた現象に反映されている。

(3) 医師に診てもらった後からだの調子はどうなったか、その経過を伝えるのです。

日野原重明(2001)

(4) でも「甘えて欲しい」と言ってるのだから、たまには甘えてあげるのも愛情です（[^]-[^]）別に何万とかのモノを「あれ買って」「これ買って」って言う訳じゃなし。たまには買い物でも行って、「これ可愛いな～」とか言ってみましょう。ほら、一度なにか買ってもらったら、次「これはいらない？」とか言われたときに、「この間買ってもらったの、すごく嬉しかったし、まだ使ってるよ～」とか言って断れるし。それに、精神的な面でも甘えられてないみたいですね。そちらのほうで甘えてみせたら、

彼の『「金銭的にもっと甘えて欲しい」欲』が、少し治まるかもしれませんね。

Yahoo!知恵袋(2005)

(3) (4) は、主語が明示されていないが、(3') (4') に【 】で主語を補ったものを示す。

(3') 医師に診て【あなたは】もらった後からだの調子はどうなったか、【あなたは】その経過を伝えるのです。

(3') では、一貫して【あなたは】が主語であるが、明示されてはいない。

(4') 「甘えて欲しい」と【彼は】言ってるのだから、【あなたは】たまには甘えてあげるのも愛情です(^-^) 別に何万とかのモノを「あれ買って」「これ買って」って【あなたは】言う訳じゃなし。たまには買い物でも【あなたは】行って、「これ可愛いな～」とか【あなたは】言ってみましょう。ほら、一度なにか【あなたは】買ってもらったら、次「これはいらない？」とか【あなたは】言われたときに、「この間【あなたは】買ってもらったの、すごく【あなたは】嬉しかったし、まだ【あなたは】使ってるよ～」とか言って【あなたは】断れるし。

(4') の冒頭文に【彼は】が補えるが、後続する述語「甘えてあげる」「言う」「行って」「買って」「買ってもらった」「言われた」「買ってもらった」「嬉しかった」「使ってる」「断れる」はすべて、【あなたは】が主語である。

日本語では、(5ab)のように複数の言い方ができるが、(5a)では視点を「私」に固定した表現、(5b)では「私」から「父」に視点を移動した表現で、(5a)に文の強い結束性を感じる。

(5a) 私は銀座で父に会って、プレゼントを買ってもらった。

(5b) 私は銀座で父に会った。父はプレゼントを買ってくれた。

授受表現について、澤田(2016)では、「(日本語の授与動詞は) 求心的か非求心的かという直示的方向性の違いに応じた「くれる」と「やる」の2系列」があると述べており、授受表現が発達できた理由として、話者の固定的視点があることと無関係ではないと考えたい。

7. 身体表現と教育について

日本の身体表現の重点要素が「肚」にあることは、小林・中嶋(2019)を含めて、日本文化研究者の指摘の共通点である。「怒る」という心的状態の表現について取り上げたい。斉藤(2000)では、「怒る」の表現変化が、「荒れる」段階から「ムカツク」状態を経て、「ムカツク、キレル」が横行すると述べ、現代日本の状況を、日本人が生きる構えを見失っていると主張している。

国立国語研究が提供している4種類の日本語コーパスから、「怒る」「むかつく」「腹が立つ」「キレル」がどれほど使用されているかの実数を示す。検索対象語数は、「怒る」「むかつく」「腹が立つ」「キレル」の4語彙とも共通である。なお、「怒る」は「おこる」「いかる」を含んでいる。(検索日 2020年1月20日)。

表6 「怒る」に関する表現のコーパス状の実数

コーパス種類	検索対象語数	怒る	むかつく	腹が立つ	キレル
現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言版	104,911,460	0	848	142	0
日本語話し言葉コーパス	7,576,046	43	13	0	0
名大会話コーパス	1,131,971	8	51	0	2
日本語歴史コーパス	16,616,639	105	0	0	0

結果からみると、感覚的表現として「むかつく」が現代語においては共通して見られるが、話し言葉においては「腹が立つ」、そして、話し言葉としての名大会話コーパスでも2例見られることから、「腹が立つ」の使用例があることはわかる。しかし、名大会話コーパスの「キレル」が見られること、(6)での「キレル」の例で30%の使用者が報告されていることから、身体文化の中心軸としての腰・ハラ文化の衰退とも無関係とは言えない。

- (6) 最近、街や電車などで「キレル人」を見かけることは多くないですか？ ニュースやワイドショーでも、あおり運転によるトラブル、路上で男性の目をいきなり傘で刺す事件などが報じられています。そこで、ずばり聞きました。「あなたは他人にキレたことはありますか?」。その結果、キレた人は約3割にとどまりました。(be Between 読者をつくる) 他人にキレたことはありますか?

<https://www.asahi.com/articles/DA3S14174930.html>

「腰肚文化」(斉藤 2000)に代表される伝統的な身体文化とは異なる文化が起きているという見方ができる。今後の言語教育の課題として、現在外国語教育のEラーニングの必要性が高まっているが、これはヴァーチャルな空間であり、IoT環境が進む中で、身体性と必要な言語情報を提供することが求められよう。

8. まとめ

現代日本社会では、「日本語らしさ」と「わかりやすい日本語」の両者が必要であると考へたい。特に後者は、多言語・多文化社会で日本語母語話者にも求めたい日本語である。言語は話者の思考内容を伝える手段であり、いずれの日本語も間主観性といった話者と聴者の「間」などの「距離」はその重要なファクターである。日本人の平均体格が、男女30代で、男性、女性の平均が1950年代にはそれぞれ160.3 cm、148.9 cmであったのに対し、2010年には171.5 cmと158.3 cmに伸びている。伸び率はそれぞれ7.0%と6.3%である(<https://honkawa2.sakura.ne.jp/2182a.html>)。こうした体格の変化がコミュニケーションに

も影響を与え、身体の変化から言語コミュニケーションの変化を起こしているとも考えられる。しかしながら、伝統的日本語、言い換えれば「日本語らしさ」が保持される必要、あるいは「日本語らしさ」を求める言語使用者には、身体性と密接な伝統的日本語らしさを保持する意識も必要であることを主張とする。

参考文献

- 赤坂治績(2003)『ことばの花道—暮らしの中の芸能語』、筑摩書房
- 伊藤公雄(1991)「I 身体論の系譜」『ソシオロジ』36 巻 1 号 p.6-16、京都大学文学部社会学研究室内 ソシオロジ編集室
- 小野正樹・李奇楠(編)『言語の主観性—認知とポライトネスの接点—』87-110. 東京: くろしお出版
- 小林康夫・中島 隆博(2019)『日本を解き放つ』、東京大学出版会
- 斎藤孝(2000)『身体感覚を取り戻す 腰・ハラ文化の再生』、NHK 出版
- 澤田淳(2016)「「行為の方向づけ」の「てくる」の対照言語学的・歴史的研究—移動動詞から受影マーカーへ—」小野正樹・李奇楠(編)『言語の主観性—認知とポライトネスの接点—』87-110. 東京: くろしお出版
- 彭広陸(2016)「日中両語のヴォイスに見られる視点のあり方」小野正樹・李奇楠(編)『言語の主観性—認知とポライトネスの接点—』35-51. 東京: くろしお出版
- Brown, P. and S. Levinson (1987) *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge University Press. (邦訳: 田中典子監訳(2011)『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』研究社)
- Leech, G. (1983) *Principles of Pragmatics*, Longman. (邦訳: 池上嘉彦・河上誓作訳(1987)『語用論』紀伊国屋書店)

資料・データ

- 坂本直文(2017)『内定者はこう話した!面接・自己PR・志望動機 完全版 2019 年度 (高橋の就職シリーズ)』、高橋書店
- 主婦と生活社(編)(2003)『ビジネスすぐ使える便利事典—オフィスでの最新マナーからスキルアップ仕事術まで (BUSINESS BOOK)』、主婦と生活社
- 社会データ実録 <https://honkawa2.sakura.ne.jp/2182.html> (2020 年 1 月 20 日閲覧)
- 筑波ランゲージグループ(1996)『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE 1 DRILLS』、凡人社
- 国立国語研究所現代日本語書き言葉均衡コーパス (通常版) BCCWJ-NT (2020 年 1 月 18 日閲覧)
- CiNii (NII 学術情報ナビゲータ) <https://ci.nii.ac.jp/> (2020 年 1 月 19 日閲覧)
- The Magnolia, Or, Literary Tablet (1833 オンライン版)
<https://catalog.hathitrust.org/Record/008696064> (2020 年 1 月 17 日閲覧)

(小野正樹、筑波大学人文社会系教授、ono.masaki.ga@u.tsukuba.ac.jp)